

荘川桜と高碓達之助

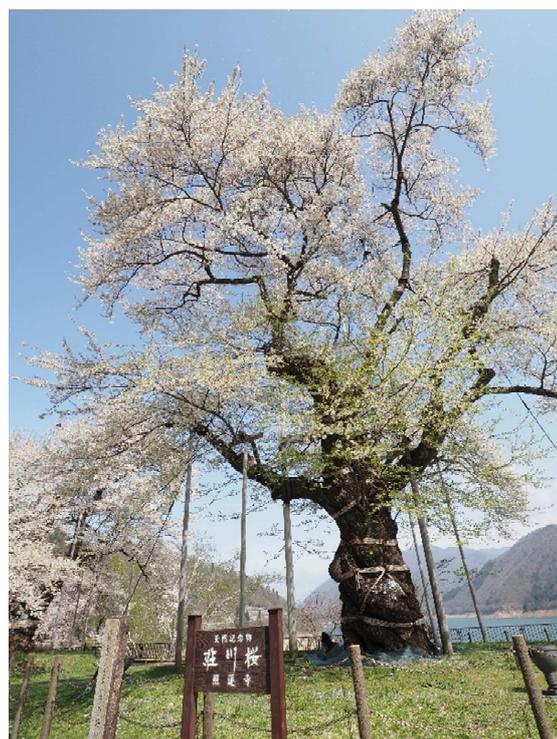
「荘川桜」をご存知でしょうか

品種はアズマヒガンザクラ（別名：エドヒガン）です。

「荘川桜」という名は、1961年 御母衣（みぼろ）ダム建設のために水没予定地となった荘川村の光輪寺と照蓮寺から、御母衣湖畔に移植された2本の桜に、荘川の名前をとって命名されました。



光輪寺桜（2023年撮影：東洋食品研究所）



照蓮寺桜（2023年撮影：東洋食品研究所）

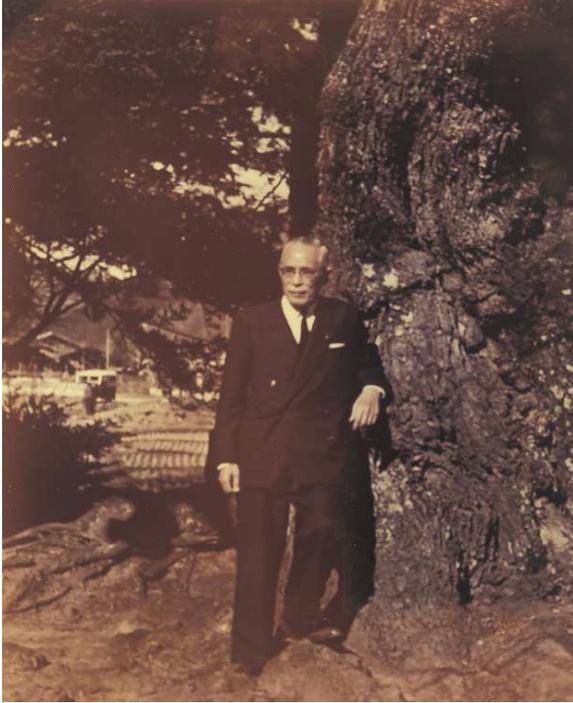
高碓達之助と水没予定地「荘川村・白川村の住民」とのストーリー

第二次世界大戦後の全国的な電力不足が経済発展の支障となっていた日本は、電力供給が緊急課題となり、1952年7月に「電源開発促進法」が制定され、1952年9月には 電源開発株式会社が設立されました。

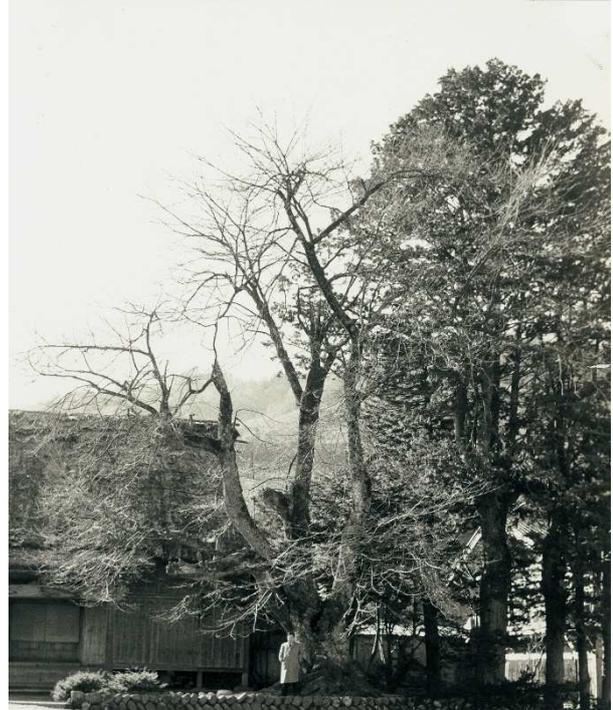
高碓達之助は初代総裁を引き受け、水力発電を目的とした佐久間ダム（静岡・愛知県）、奥只見ダム（福島・新潟県）、田子倉ダム（福島県）、御母衣ダム（岐阜県）などのダム建設計画を決定しました。

大規模なロックフィルダムとして知られる御母衣ダムの建設では、水没予定地となった住民の反対運動が、1952年6月に最初の建設反対住民大会が開かれてから、7年半もの期間行われました。「絶対反対期成同盟死守会」は岐阜県内の反対運動だけでなく、上京しての陳情を13回も行ったと記録されています。最終的には「幸福の覚書」が電源開発株式会社と「死守会」の間に結ばれ、建設が決まりました。

1959年11月に「死守会」解散式が行われ、高碕はすでに電源開発の総裁を辞していましたが、招かれて出席しました。「自分が直接現地に出かけて皆さんの悲しみの声を聞いていたら、御母衣ダムは造れなかったかもしれない」と語ったと言われています。「死守会」の方案内で水没予定地をまわった高碕は、光輪寺境内に巨大な桜を発見しました。そして故郷を失うことになる住民のために、なんとかしてこの桜を残したいと考えました。



東洋食品研究所所蔵



東洋食品研究所所蔵

しかし、この桜は樹齢450年を超える老木で、重さが40t近くありました。高低差が約50メートル、移動距離は約600メートルという、植樹史上類をみない移植工事は、当時の技術では不可能と思われました。

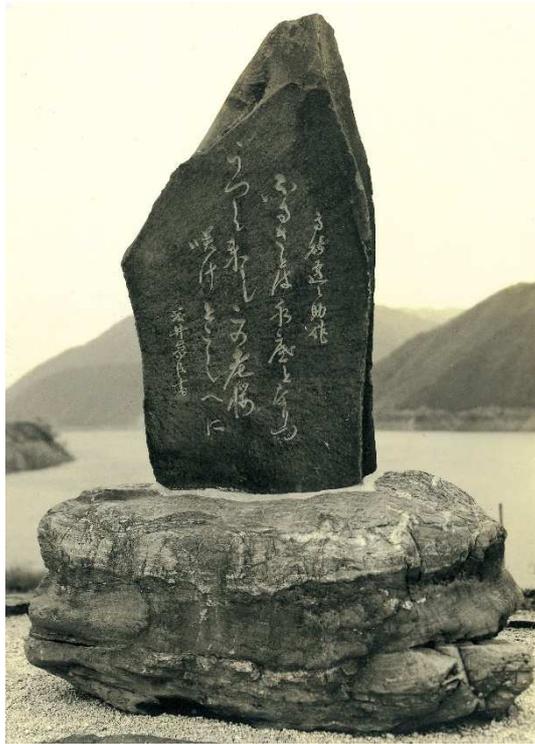
高碕は移植について桜博士と言われていた笹部新太郎氏に相談しました。笹部氏は一旦断りますが、高碕の熱意に押されて引き受けました。現地の調査に出かけた笹部氏は、光輪寺の桜のほかにも、照蓮寺の桜を発見し、「2本あれば、どちらか1本は活着するかもしれない」との思いから高碕に相談し、2本の移植を行う事となりました。造園業者で植木職人の丹羽政光氏の助力も受け、世紀の大移植が行われました。

そして翌年の春にはわずかながらも花を咲かせ、その翌年の1962年（昭和37年）にも花を咲かせ、移植は成功と確信されました。同年6月に水没記念碑の除幕式に招待された高碕は、次のような歌を詠んでいます。

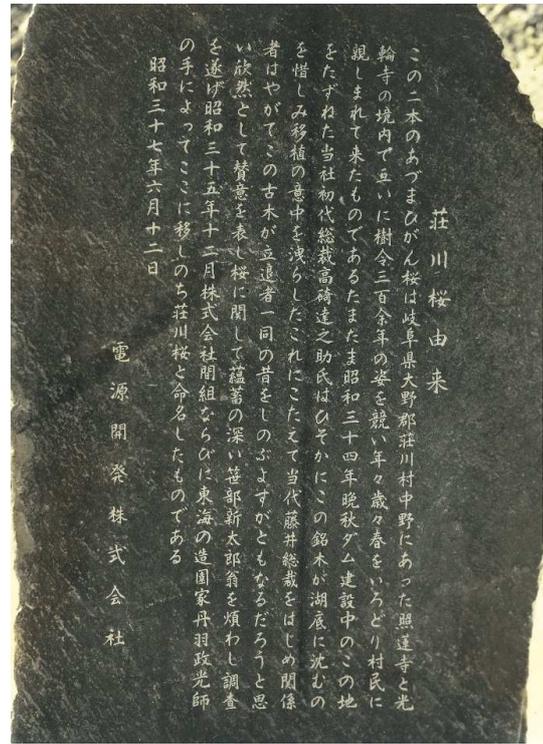
「ふるさとは湖底（みなそこ）となりつ うつし来し この老桜 咲けとこしへに」

また、後に「進歩の名のもとに、古き姿は次第に失われていく。だが、人力で救えるかぎりのものは、なんとかして残していきたい。古きものは古きが故に尊い」とも語っています。

1964年（昭和39年）死期が迫っている高碕は、病床から笹部新太郎氏に移植した桜の命名について手紙で相談していましたが、当時の電源開発株式会社の藤井崇治総裁によって「莊川桜」と命名されたのは、高碕の死後でした。



東洋食品研究所所蔵



東洋食品研究所所蔵

現在、全国各地に莊川桜の二世などが植樹されており、莊川桜の名前も多くのの人々に親しまれています。高碓記念館にも1本の莊川桜があり、可憐な花を咲かせています。開花時期はソメイヨシノよりは少し早く、3月中旬から下旬に毎年開花しています。



高碓記念館(2024年撮影)



高碓記念館(2024年撮影)